児桜貝塚

秋田市教育委員会

序

近年文化財についての一般の認識が高まってきたことは、ご同慶のいたりに存じます。

しかし、急速に進展する国土開発（工場誘致、住宅団地の造成等）による史跡地、遺物包含地の破壊はめだって多くなりつゝあり、誠に憂慮にたえません。

寺内字児桜貝塚は、裏日本に数少ない貝塚として、史跡秋田城跡発掘調査のおり発見された貴重なものですが、これとても、宅地造成のため、もはやその形状も滅失せんばかりになっておりましたが、今回、地主加賀谷金五郎氏、隣接地小柳宗雄氏の深いご理解のもとに、発掘調査をしたもので、発掘は、市教育委員会が主体となり、担当者には県文化財専門委員奈良修介氏を、協力者として県文化財保護協会三浦一郎、文化財専門委員加賀谷文治郎、秋大教授半田市太郎、鷹巣農林高校富樫泰時、敬愛高校鍋倉勝夫、下浜小岩見誠夫の各氏を得、また、秋田大学、鷹巣農林高等学校、金足農業高等学校、敬愛高校、経済大附属高校、秋田南高校の学生および地元土田民雄氏の献身的な奉仕のもとに、去る７月17日から３日間にわたって行われたものであります。

前述のとおり、児桜貝塚は宅地造成により滅失寸前にあり、従いましてそのスケールも小さいものでしたが、出土遺物を、まとめた冊子は極めて貴重なものと考えられ、学究の参考の資として、今後永くこれを保存いたす所存であります。

こゝに衷心から発掘調査にあたられた方がたに厚くお礼を申しあげます。

１９６５年９月30日

秋田市教育委員会

教育長　富　樫　重　次　郎

目　　次

序 …… 富 樫 重次郎
1. 遺 跡 の 環 境 …… 1
2. 発掘に至るまでの経過 …… 2
3. 発 掘 日 誌 …… 3
4. 出 土 遺 物 …… 6
5. 秋 田 の 貝 塚 …… 14
6. 結　び …… 15
挿図目次、図版目次
第1図　秋田五万分の一（国土地理院）…… 1
第2図　児桜貝塚発掘付近図 …… 2
第3図　発掘場所の図 …… 4
第4図　断　面　図 …… 5
第5図　石　器 …… 7
第6図　石　器 …… 8
第7図　土　器 …… 9
第8図　土　器 …… 11
第9図　土　器 …… 12
第10図　刻　線　礫 …… 13
図版1　貝塚遠景、貝層断面 …… 16
図版2　土　器 …… 17
図版3　土　器 …… 18
図版4　土　器 …… 19
図版5　石　器 …… 20
図版6　石器、刻線礫 …… 21

1 遺跡の環境

高清水丘陵は侵触残丘で、そのほとんどが国の史跡指定を受けているが、面積約64ヘクタールである。秋田城設置（733年）以前は、雄物川が丘陵の東南麓（児桜貝塚は丘陵の東南端）を洗い、また西麓は日本海が深く入り込んでおり、要害の地であった。加えるに、砂礫層であるこの丘陵は清水の湧出が多く（出土品瓦根瓦に「高水」の刻名あり）、飲料に事欠かなかった。

第 1 図　×印貝塚　黒線で囲んだ部分、史跡秋田城跡

児桜貝塚は、寺内字児桜29番地にある（第1図）が、前面に雄物川、後背に高清水の原野を控え、往時採集経済生活には最適の地だったことが想像される。貝塚南側は、（第2図）のごとく丘陵の切りくずしにより、住宅跡と想定される場所は既にブルドーザーで整地されて発掘不可能だったことは惜まれる。児桜貝塚を含む付近の丘陵は、後背地の高清水の丘陵が漸次低くなり、30～35メートルの高さで、丘陵の突端となる。現在南に旧市街地、東に秋田平野、操車場、八橋油田を越え太平の山なみが望見される風光の地でもある。この台地一円にまだ貝塚は発見されていない。　（飯塚喜市）

2　発掘調査に至るまでの経過

児桜貝塚の発見は、史跡秋田城跡発掘のおり(昭和37年)、地元佐藤君(高清水中学生)によってなされた。

高清水の丘陵は、約1,200年前、律令制度大成の一貫である東北地方開拓の基地として、出羽柵が設定されたところであるが、それ以前の記載はみあたらない。

史跡秋田城跡発掘当時、発掘調査員らにより、出土遺物からして、児桜貝塚は約5,000年前のものであり、県内8か所の貝塚のうち、角間崎貝塚に次ぐ古いものと推論されていた。

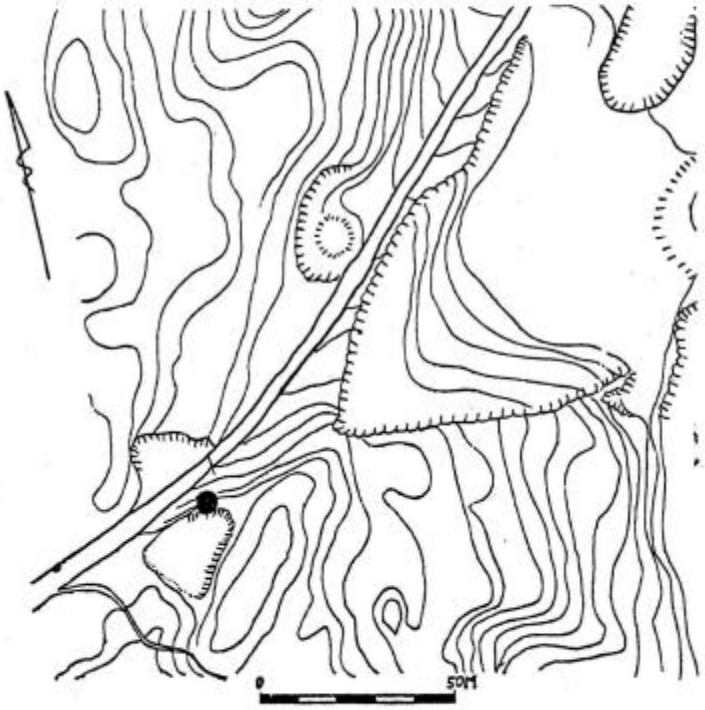
児桜貝塚がマスコミによって一度報道されるや、遠近のマニヤや児童生徒の盗掘がはじまったため、柵条をまわし、棒柱を設置してその保全と愛護につとめた。

その後38年ごろ、土地の売買や宅地の造成がおこなわれ（大規模な沢の埋めたて）貝塚の大部分を含めた台地の平地化が促進された。

39年にいたり、宅地化による貝塚滅失が明確になるにおよんで、市文化財保護委員会に諮問し、同40年度に発掘調査をすることになった。時あたかも、史跡秋田城跡の発掘調査も一段落し、年次的に市としてもまとまった事業をおしすすめようとの委員の意見も強く、予算措置を得て実施にふみきった。

40年6月19日、発掘責任者奈良修介氏を中心に、千分の一地形図をもとに、現地踏査をし、発掘調査計画の打合わせを行い、翌7月17日、県内に洪水をもたらしていた雨天をついて発掘を決行したのである。（飯塚喜市）

第2図　児桜貝塚発掘付近図　●印は発掘現場



3 発 掘 日 誌

7 月 17 日（土）、くもり時々雨

作業開始10時、発掘用具、テント等を高清水小学校から運搬。昼食、午後１時から調査員の紹介が行なわれ、発掘作業開始、第１トレンチ、第２トレンチを設定。第１トレンチを八部どおり発掘。午後５時作業終り。市社会教育課長来訪。

7 月 18 日（日）、くもり時々晴

９時作業開始、第１トレンチ断面図を作成し完掘。第２トレンチを発掘。貝の種類はシジミ貝で他の貝類見あたらず。貝に混って土器、石器片出土。測量班を設け、地形測量開始、午後第３トレンチを設けて発掘開始。市教育長来訪。

7 月 19 日（月）、くもり

９時作業開始、第３トレンチ定掘、第２トレンチも午前中で殆んど発掘終了す。第２トレンチより刻線礫出土。第４トレンチ設定、また第２トレンチを東西に拡張し貝のある部分を全て発掘。作業午後３時完全に終了。

この発掘調査で、住居址その他の遺構は全く確認することができなかった。（富樫泰時）

児桜貝塚発掘調査参加者名

県文化財専門委員奈良修介、秋田大学教授半田市太郎、県文化財専門委員三浦一郎、下浜小学校岩見誠夫、敬愛学園高校鍋倉勝夫、市教育委員会小野勇一、飯塚喜市、鹿巣農林高校富樫泰時、明治大学学生船木義和、秋田大学学生杉渕馨

金足農業高校生徒

本間ひろみ、工藤精子、一ノ関ニエ子、菊地純子

敬愛学園高校生徒

高岡純子、小滝貞子、

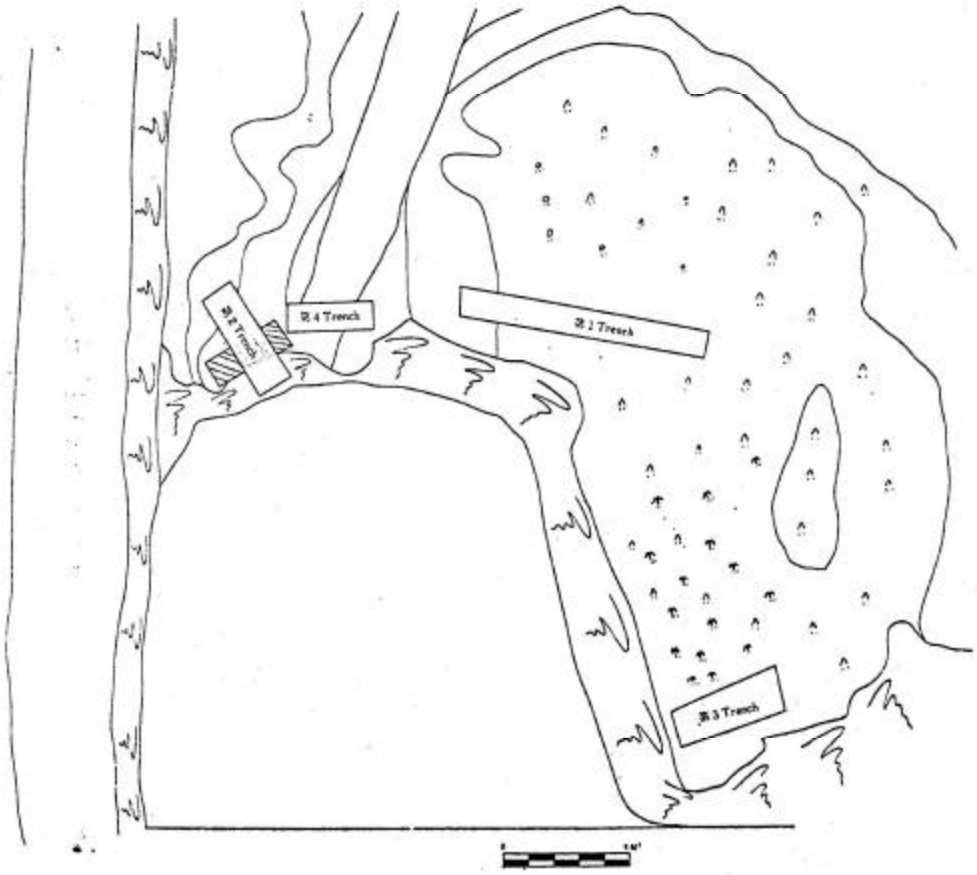
経済大学附属高校生徒

太田清隆、高橋秀文

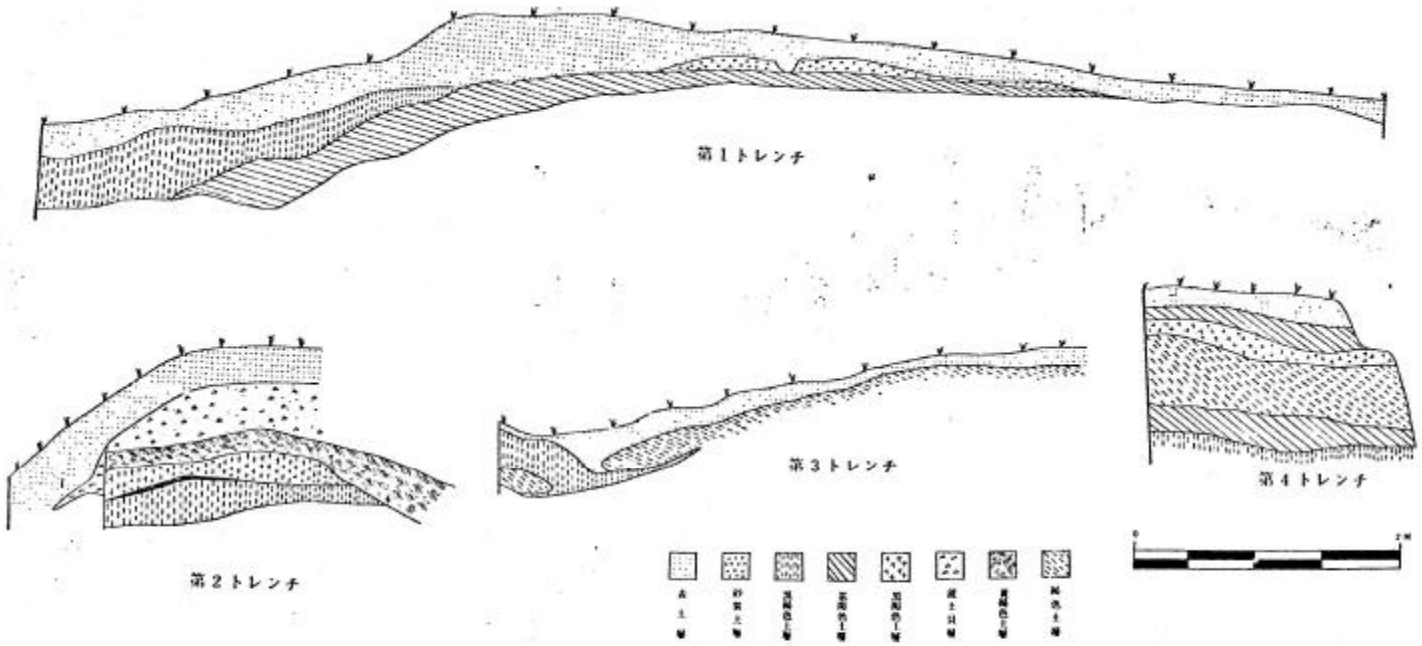
鹿巣農林高校生徒

高杉真澄、工藤隆夫、小畑貞夫、浅利金造、小笠原勇、高橋多知夫、木村良一、田口ふさ子、成田秀子長岐やす子、花田裕子、佐藤ひとみ、長岐悦子、斎藤和子

第３図　発掘場所の図



第４図　断　面　図



4 出 土 遺 物

石　器

石器は25点出土した。その内容は石錘11、磨石1、石槍2、石ヒ1、石鏃1、その他剝片を利用した石器10である。

石　錘、第5図1～11　　図版5

10を除いた他は全て完形品である。これらの石錘は全て河原石を利用している。形は楕円形で、その長径の両端を打欠いて石錘としている。それぞれの重さは別表のとおりである。

磨　石、第5図12

円形で断面は楕円形を呈す。この石器にはベンガラ（赤色顔料）が一面に付着している。

石錘No.	重さg
石錘1	195 g
〃 2	225 g
〃 3	230 g
〃 4	165 g
〃 5	210 g
〃 6	185 g
〃 7	67 g
〃 8	165 g
〃 9	103 g
〃 10	85 g
〃 11	103 g
土錘1	75 g
〃 2	35 g

（第1表）

石　槍、第6図13、14　　図版6

13は完全な石槍で両面に加工がある。14も石槍の破片と思われる。しかも両面に加工がある。石材は2つとも硅石らしい。

石　鏃、第6図15　　図版6

一点だけ出土した。三角形を呈し、底辺が凹んだものである。薄く、丁寧に作っている。石材は硅石。

石　ヒ、第6図16　　図版6

石ヒは完全なものはない。この石器はほんの少しつまみのついたもので縦形か、横形かはっきりしない。17の石器もあるいは石ヒの破片かもしれない。石材は2つとも硅石。

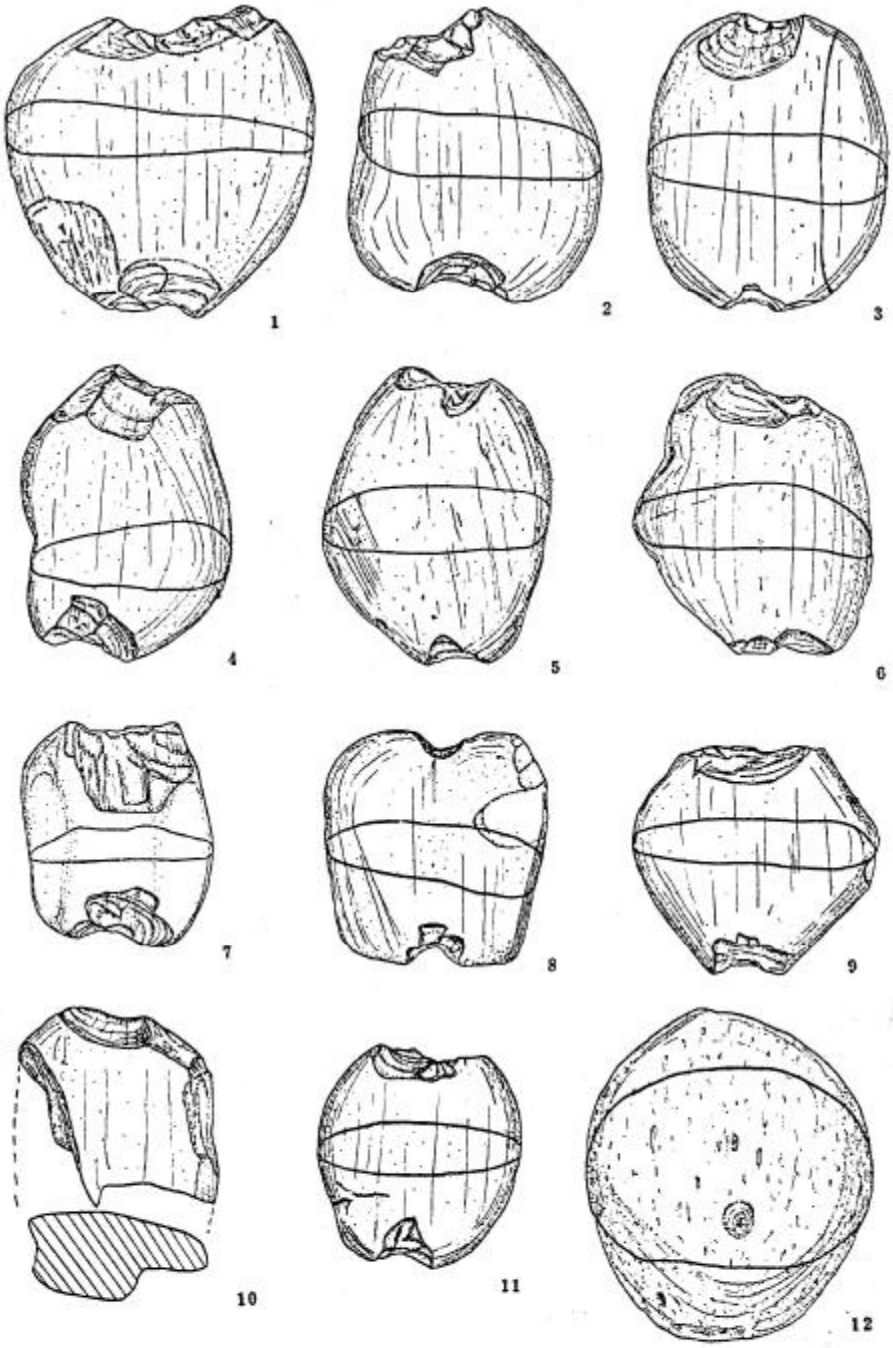
剝片石器、第6図18～26　　図版6

東北地方特有の不定形な剝片を利用し、それに少し加工の施した石器である。22、23、25、26は頁岩製、24はメノオ質の石製、他は硅石製である。

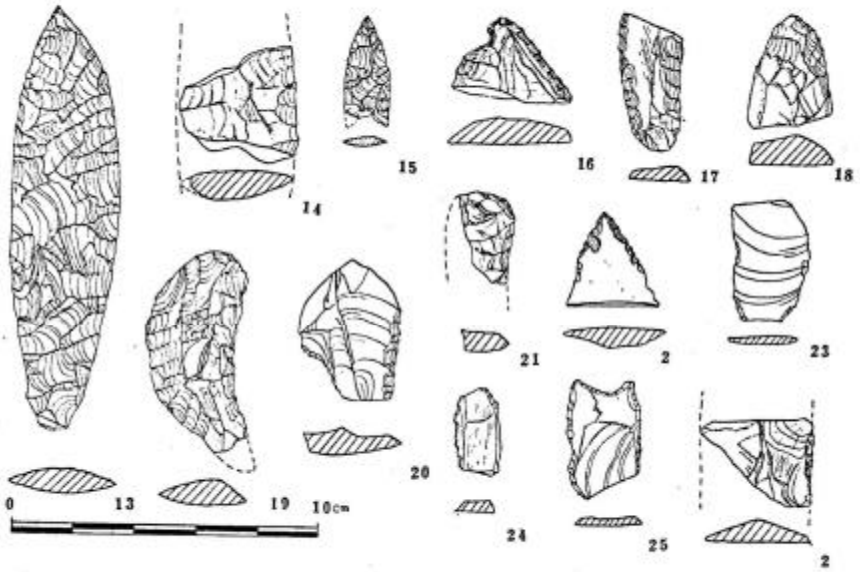
（富樫泰時）

石質については、鹿巣農林高校松田孫治先生に御教示得たことを明記し、ふかく謝意を表したい。

第 5 図　石　　錘　　S＝½



第 6 図　石　　器　　図



土　器

児桜貝塚の発掘で得た土器はリンゴ箱半分ほどである。土器は全て縄文時代前期のもので、その殆んどが胎土に繊維を含んでいる。文様は縄文が主体をなしている。

第一類土器　第7図1　　図版2

本類は1一片だけである。褐色を呈し、箆状工具で、巾が広く浅い沈線を施している土器である。焼成良好、繊維は含んでいない。

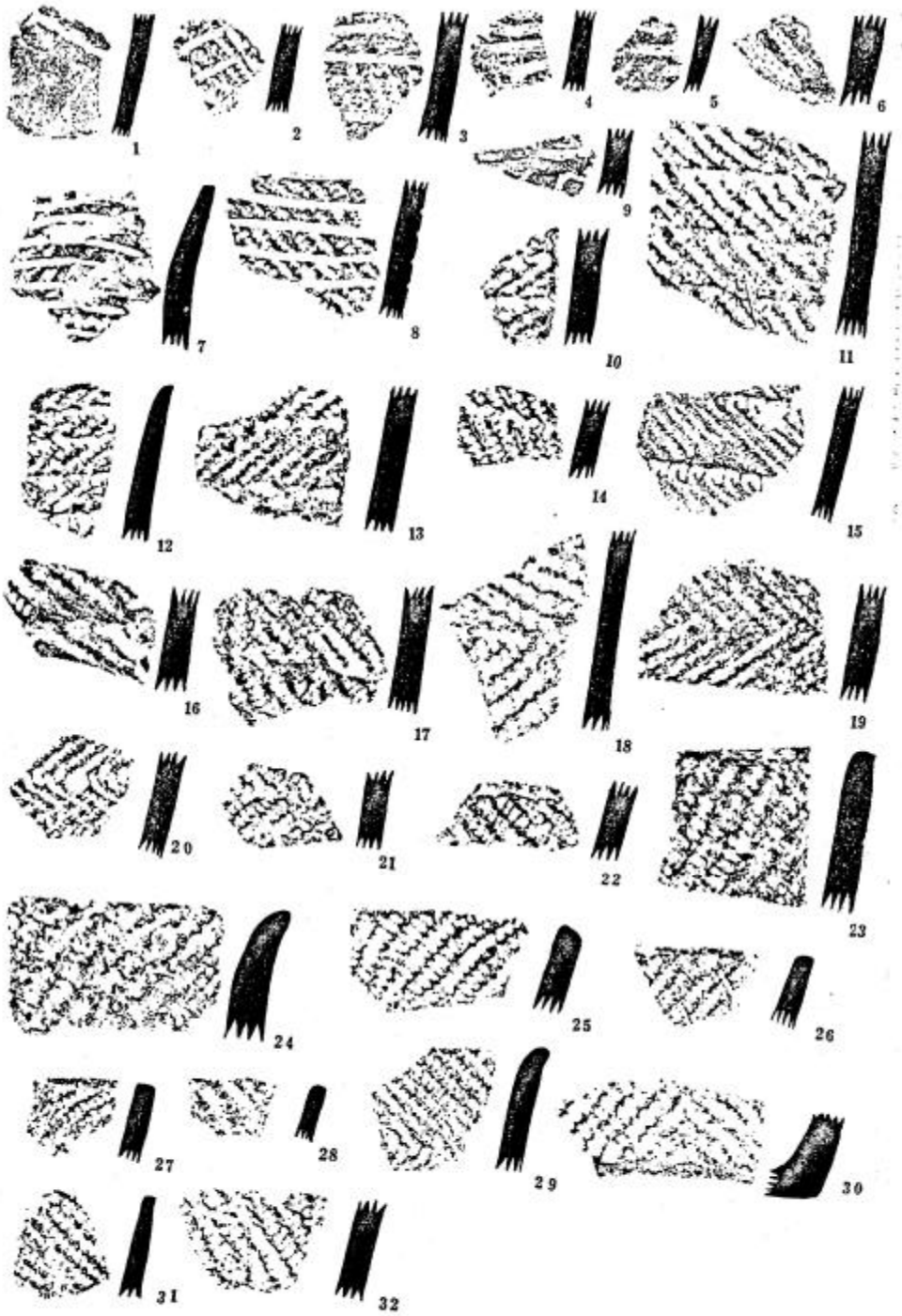
第二類土器　第7図2～6　　図版2

本類は撚糸数本を一組とし、これを軸に巻いて回転した所謂絡状体文のある土器である。胎土に繊維を含んでいる。2は地文に斜行縄文（RL）を施文し、その上に第一類と同じような工具で沈線を施している。3、4の地文ははっきりしない。その上に三本の撚糸（三本ともL）を一組にした絡状体文である。5はLとRの撚糸、6はLとLの二本の撚糸からなっている。

第三類土器　第7図2、7～9　　図版2

本類は地文に斜行縄文があり、その上に比較的太い沈線が横位あるいは斜位に施している土器である。胎土に繊維を含んでいる。2は地文に斜行縄文(RL)を施し、その上に斜に第一類と同じような工具で沈線を施している。7は口縁部破片で、器形は頸部から外反する。地文に斜行縄文（LR）を施している。8は地文に斜行縄文（RL）を施している。7、8は太く、しっかりとした沈線が横位に施している。9は地文に文様は認められない。沈線も第一類に近い。はっきりしないが大木2b式等に認められる結束の一部らしい文様も認めることができる。

第 7 図　土　器　　S＝½


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

第四類土器　第７図10～第８図42　　図版２～３

本類は縄文即ち羽状縄文、斜行縄文のある土器である。胎土に繊維を含んでいる。

ａ類　所謂帯状縄文をなすもので、全て胎土に繊維を含んでいる。10、13は同一個体と思われる。ＬＲの斜行縄文で「原体の末端を示している。」土器で、12も同じ手法でつけた文様であろう。14、15はＲＬの斜縄文の末端を施文したもので、東北地方では大木Ⅰ式、室浜式土器によく認められるものである。16、17、22等もこのａ類の仲間に入れてよい土器のように思われる。

ｂ類　第７図18、19、20、21、29で所謂一般に羽状縄文と呼ばれているものである。18は複節の斜行縄文（ＲＬＲとＬＲＬ）を交互に施文した羽状縄文である。19も18と同様である。20はＬＲとＲＬを結束したもの、21は20の場合と逆でＲＬとＬＲを結束して作った羽状縄文である。その他30のように複節斜行縄文ＬＲＬを、そして途中でＲＬＲを施しているものもある。底部に文様はない。

ｃ類　斜行縄文のものである。23、24、25、26、27はいずれもＬＲの斜行縄文である。28、31、32、36、37、39、はいずれもＲＬの斜行縄文である。

ｄ類　その他の縄文をこの仲間とした。33、34は原体の回転方向はまちまちである。40、42は底部の破片で底に縄文を施している。41は撚糸文である。

第五類土器　第８図43～45　　図版３

本類は撚糸を５mm～７mm程の間隔をもって軸に巻いて、それを横位に回転して作った文様をもつ土器である。撚糸は全てＲである。胎土に繊維を含んでいる。

第六類土器　第８図48、49、51、53　　図版３

本類は口縁部に無文帯があってその下に斜行縄文を施し、薄手の土器である。胎土に繊維を含んでいる。口唇部が特徴的で、口唇は図のように平で、真中が少し凹んでいる。この口唇を作ったため口唇部のところだけが外に出ている。小形の土器のように思われる。

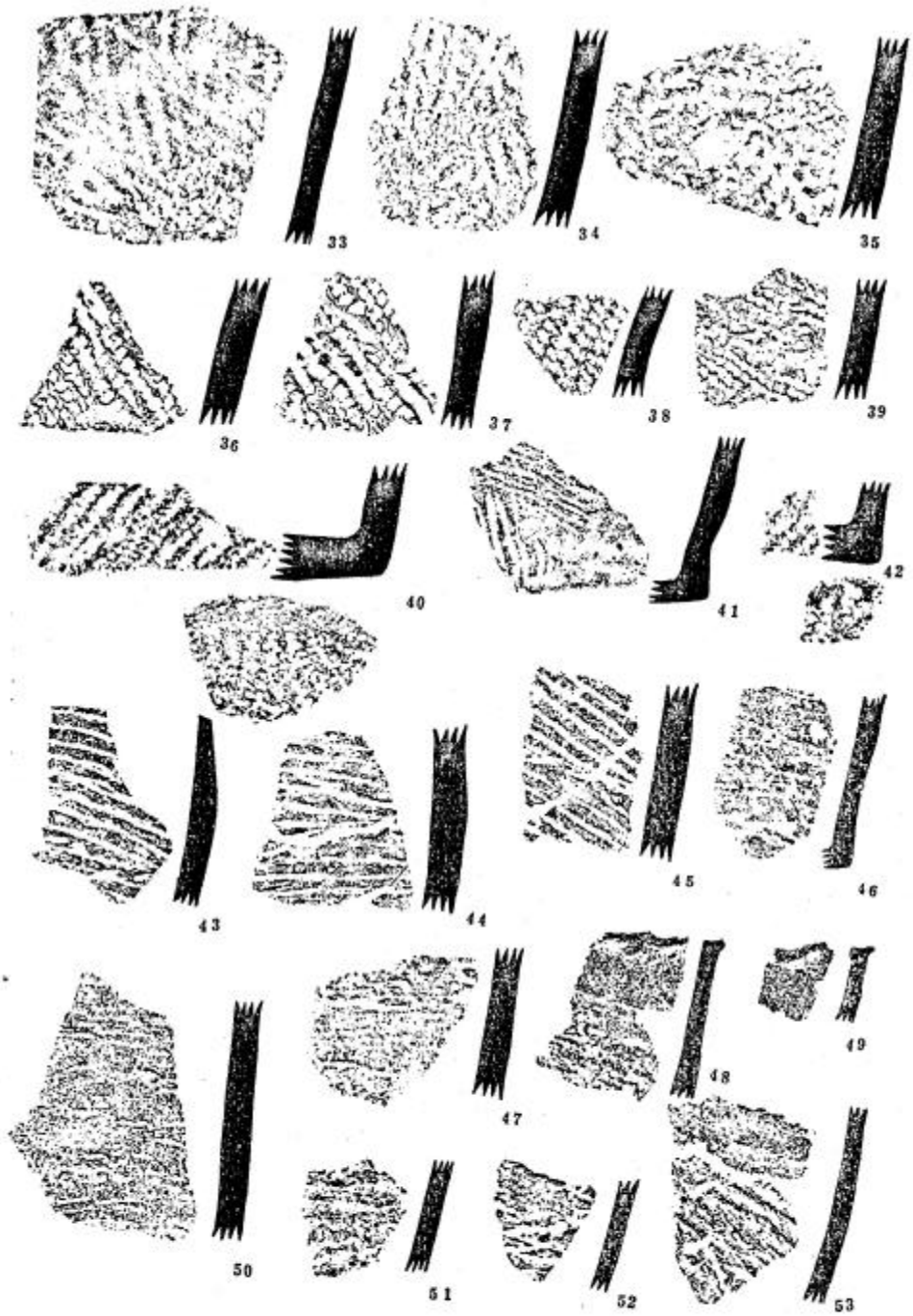
第七類土器　第８図46、47、50、第９図54～57　　図版３～４

本類は一般に綾絡文と呼ばれている土器である。胎土に繊維を含んでいる。本類の土器が児桜貝塚の主体をなすものである。46、47、50の文様は浅く、はっきりしないが綾絡文の一種と思われる。Ｌの撚糸を使って文様を施している。54、55、56のように密に綾絡文のあるものもある。54は口縁部の破片で口縁は波状を呈す。57、58、59は比較的あらい綾絡文である。59は肩部から頸部にかけての破片で頸部から口縁部にかけて無文帯がある。64、65のようなものもある。66は結束の数が数えられる好例で、６つの結束のある原体を回転している。撚糸はＬが多く、Ｒは65だけである。63、68のように結束と結束とに間隔のあるものも認めることができる。69、70も綾絡文の一種と考えている。75はかなり大きい破片でＬＲの原体に結束が1.5cmの間隔をとって２つ作り、それを何回も横位に回転している。又口縁部は階段状に段がついている。

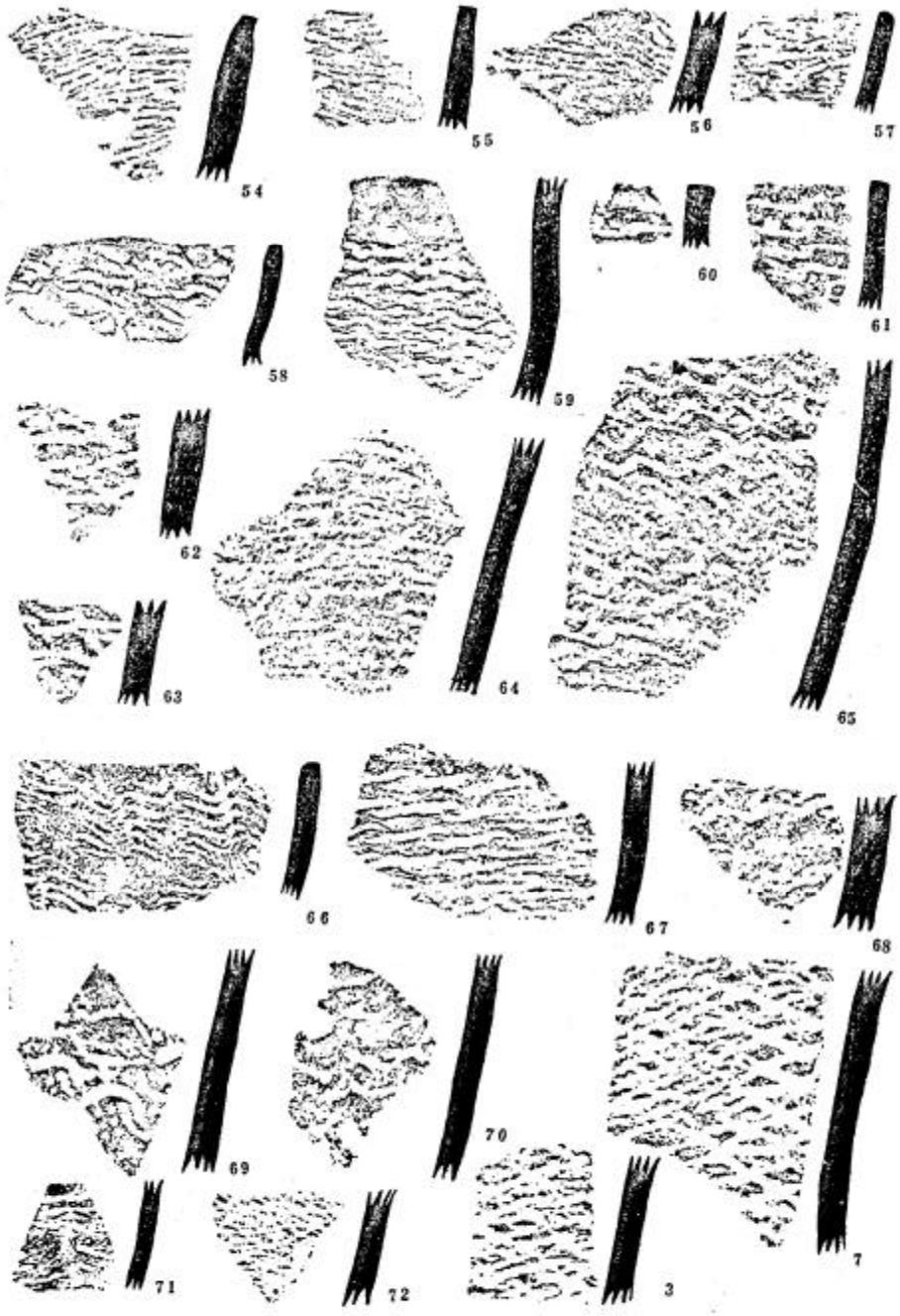
第八類土器　第９図71　　図版４

本類は71一片だけである。Ｌの撚糸を軸に巻いて横位に回転して文様を作っている。繊維を多く含んで

第 8 図　土　　器　　S＝1/2



第９図　土　　器　　S＝½



いる。

第九類土器　第9図72、73、74、　　図版4

本類は網目文のような文様で、胎土に繊維を含む土器である。Rの撚糸を軸に斜に巻いて交叉させ、それを施文したものである。（富樫泰時）

土　製　品

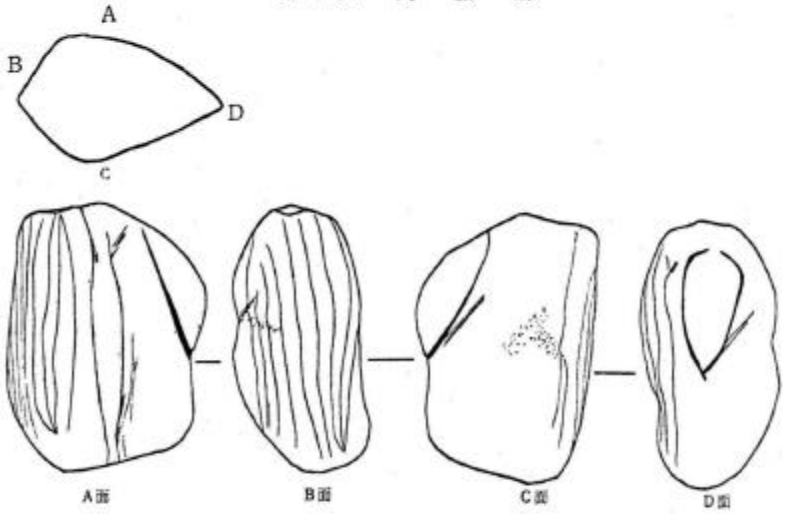
土錘が二点出土している。いずれも土器片を利用している。土器はいずれも繊維を含み、斜縄文を施している。重さは第1表のとおりである。

刻線礫　10図　　図版6

こぶし大の自然石に巾1mmにみたない細い14本の線とA面右端から上端に走っている太くて、深い刻線のある石である。A面はもっともよく刻線のつけられた面である。この面の右端中央部から上端に走っている刻線がもっとも深く、深さ2mmほどである。この刻線はC面で左側にあらわれ、D面からみるとD図のようになっている。又A面（B面）下端で三本の刻線が一緒になっており、この線の上端もそれに近い状態を示している。これらの刻線は何を意味しているか不明である。出土層位は貝層である。

（富樫泰時）

第10図　刻　線　礫



参考文献　山内清男「関東北に於ける繊維土器」史前学雑誌1―2（昭和4年）　同「斜行縄紋に関する二、三の観察」史前学雑誌2―3（昭和5年）

5 秋田県の貝塚

日本の貝塚が表日本に多く、裏日本に少ないことは承知の通りである。裏日本に位置する秋田県もその例にもれず、貝塚の数は少ない。現在県内で確認されている貝塚はこの児桜貝塚を含めて次の8つを数えるにすぎない。

1、柏子所貝塚（縄文時代晩期）
2、落合貝塚　（縄文時代中期）
3、角間崎貝塚（縄文時代早期～前期）
4、萱刈沢貝塚（縄文時代中期）
5、女川貝塚　（縄文時代晩期）
6、西目貝塚　（縄文時代前期）
7、新屋浜貝塚（縄文時代晩期）
8、児桜貝塚　（縄文時代前期）

この中で児桜貝塚と関係のある貝塚は、角間崎貝塚と西目貝塚をあげることができる。角間崎貝塚は古くから学会に注目された貝塚であった。昭和29年10月県教育委員会が主催し、故武藤鉄城氏、秋田大学教授半田市太郎氏等によって発掘調査が行われている。報告書は未だ刊行されておらず、詳細は不明であるが、半田市太郎氏のご好意によって秋田大学にある遺物を実見することができた。それによると内面に条痕、縄目のある土器が含まれ、児桜貝塚より一時期古い遺跡である。貝塚の貝はハマグリ、オキシジミ、アサリ、サルボー等である。

西目貝塚は大正13年武藤一郎氏によって二回の小発掘が行なわれ、縄文時代前期の貝塚であることがわかった。「八郎潟の研究」（註1）掲載の土器の写真を見ると大木3式土器が認められる。このことから児桜貝塚の直後に位置する貝塚と思われる。貝塚の貝はヤマトシジミである。

これらの貝塚は児桜貝塚を間に北と南に位置し、今後この地理的な関連をもっと詳細に調べてみる必要があると考えている。（富樫泰時）

註1　奈良修介、磯村朝次郎「八郎潟周辺の遺跡」八郎潟の研究（昭和40年）秋田県教育委員会

6 結　　び

本貝塚から出土した自然遺物については都合により、その詳細をここで報告できないが貝はシジミが主体をなし、他の貝は殆んど認められなかった。それに魚骨、獣骨も数片出土しているがこれもその種類は不明である。

このように自然遺物を完全に調べあげないうち本貝塚を結論ずけるのは無謀であるが、文化遺物のみで考察を進める。

土器は縄文時代前期前半の所謂「羽状縄文土器群」（註1）から大木2式土器までの土器である。東北地方の縄文時代前期前半には所謂大木1式土器、あるいは円筒下層a式土器以前に数型式ある。この時期の資料も本県だけみても少しずつではあるが発見されている。雄勝郡雄勝町岩井堂第2洞穴出土土器（註2）や鹿巣町湯車のような半截竹管による連続爪形文を有する土器群、（註3）角間崎貝塚や、小坂町付近から出土している内面に縄文が施され、外面に縄文あるいは羽状縄文をもつ土器群がそれである（註4）。これら「羽状縄文土器群」（註5）の最後に編年されるのが本貝塚で第4類とした仲間であろうと思われ、南部の形式にあてはめれば大木1式土器の時期と考えられる。

第2類土器は文様の施文法等で第5類土器と近似し、大木2a式土器に対比できよう。第7類土器は本貝塚の主体をなす土器である。胎土に繊維を含んでいる。粘土紐を貼りつける手法もあらわれる。本類は大木2b式土器に対比できよう。このように本貝塚から出土した土器を他地方の（特に南部の大木式）土器に対比してみると時間的にかなり長い間、この地域に生活したと考えられる。しかし、貝塚の規模、土器の出土状態等から考えて前述したほど長時間にわたって生活した遺跡とは考えられないのである。こうした問題は土器分布圏の周辺に間々ある問題のように考えられ、土器型式と一つの遺跡から出土する土器群との関係はもっと慎重に考えねばならない問題であろう。

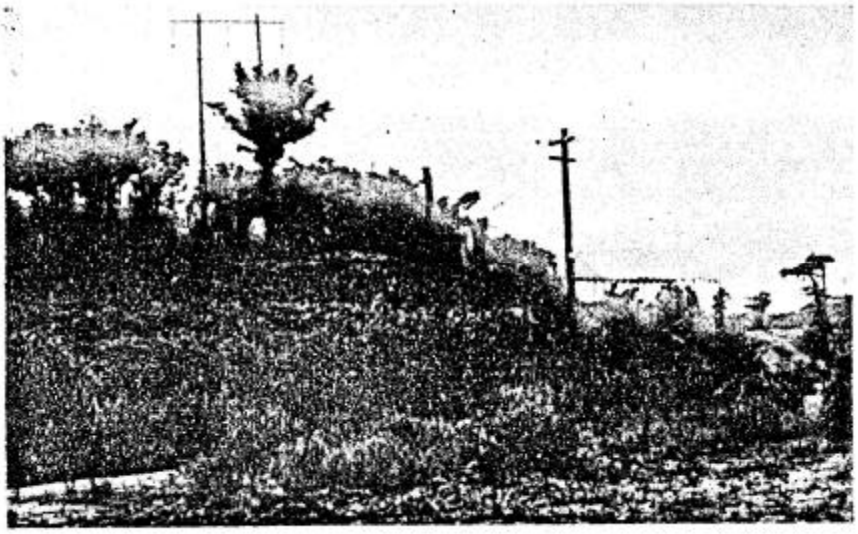
本貝塚からはその他土錘、石錘、刻線礫が出土している。この地域では石錘が非常に多く出土するのが常であり、それが一つの特徴と考えてよいのである。本県貝塚から出土した石器全体から見た石錘の出土数は非常に多い。この石錘と一緒に土器片を利用した土錘2個出土しており、これに注目する必要があろう。（註6）

刻線礫は直接関係づける遺物は見当らないが、本県の場合は縄文時代に所謂「鮭石」なる名称で呼ばれている魚刻文のある遺物が発見されている。（註7）また中期の遺物から鋸歯文を刻線した石器も出土している。（註8）今後これらの遺物との関係において解決しなければならない遺物と考えられる。

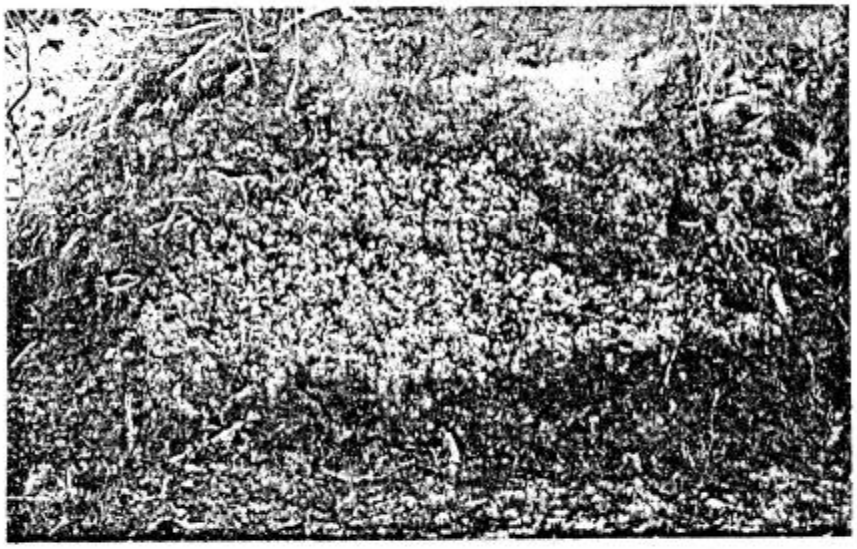
（富樫泰時）

註1　林謙作「東北」河出書房、日本の考古学（縄文時代）昭和40年、　註2、富樫泰時『院内岩井堂洞穴下層の土器について」秋田考古学十周年記念特集号、昭和39年、　註3、大和久震平、「秋田県史（考古編）」昭和35年、　註4、奥山潤氏のご好意により小坂町付近から出土したこの期の土器を実見することができた。　註5、註1に同。　註6、渡辺誠「土器片利用の土錘に関する二、三の考察」昭和38年、　註7、武藤鉄城「秋田県下の魚形刻石」石器時代3、昭和31年、　註8、五十嵐氏のご好意により秋田市高梨台遺跡の遺物を拝見することができた。その時石器に鋸歯状の刻文あるものがあった。

図　　版　　1



貝　塚　遠　景



断　　面

図　版　2　　S = 1/2

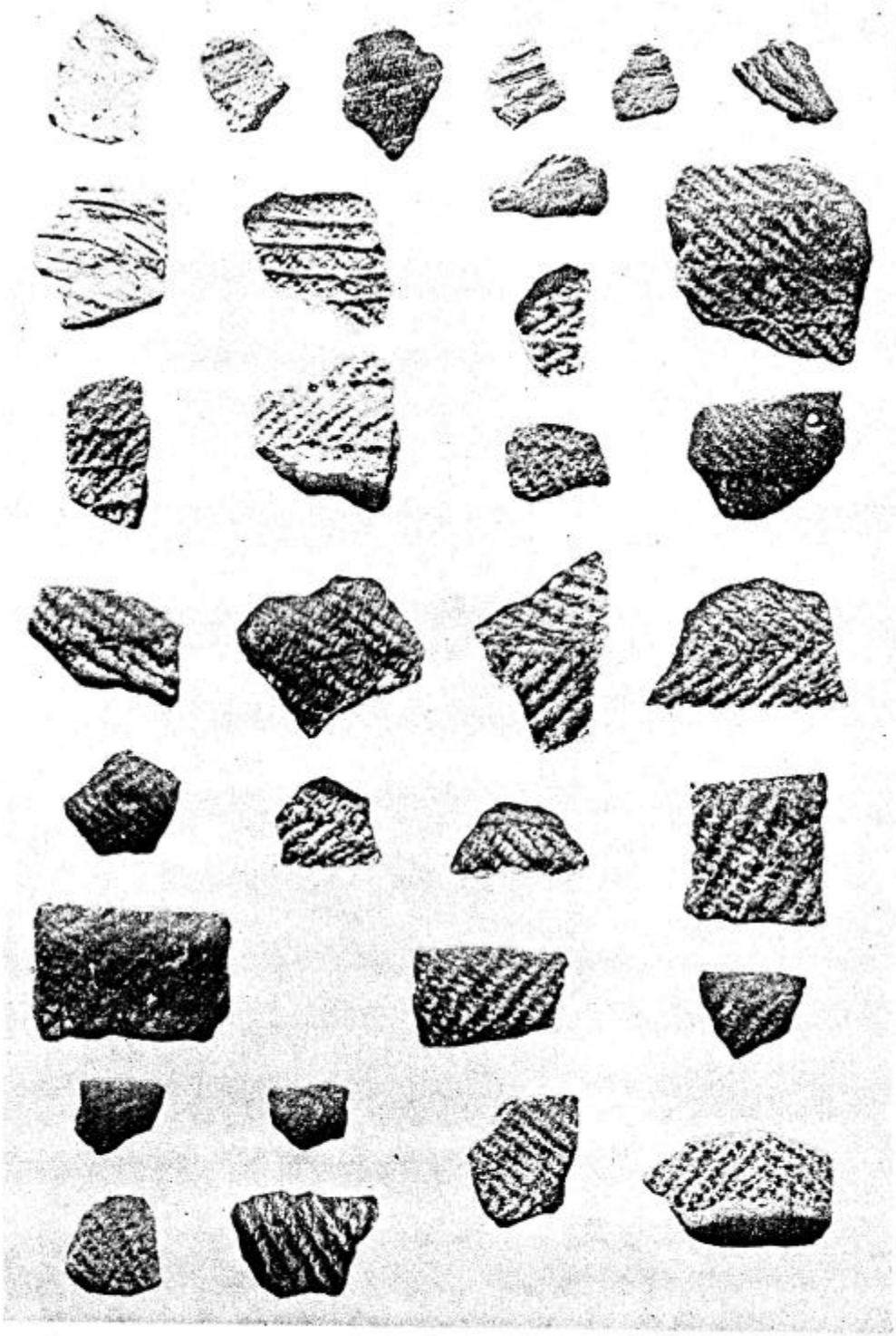


図　版　3　　S = 1/2

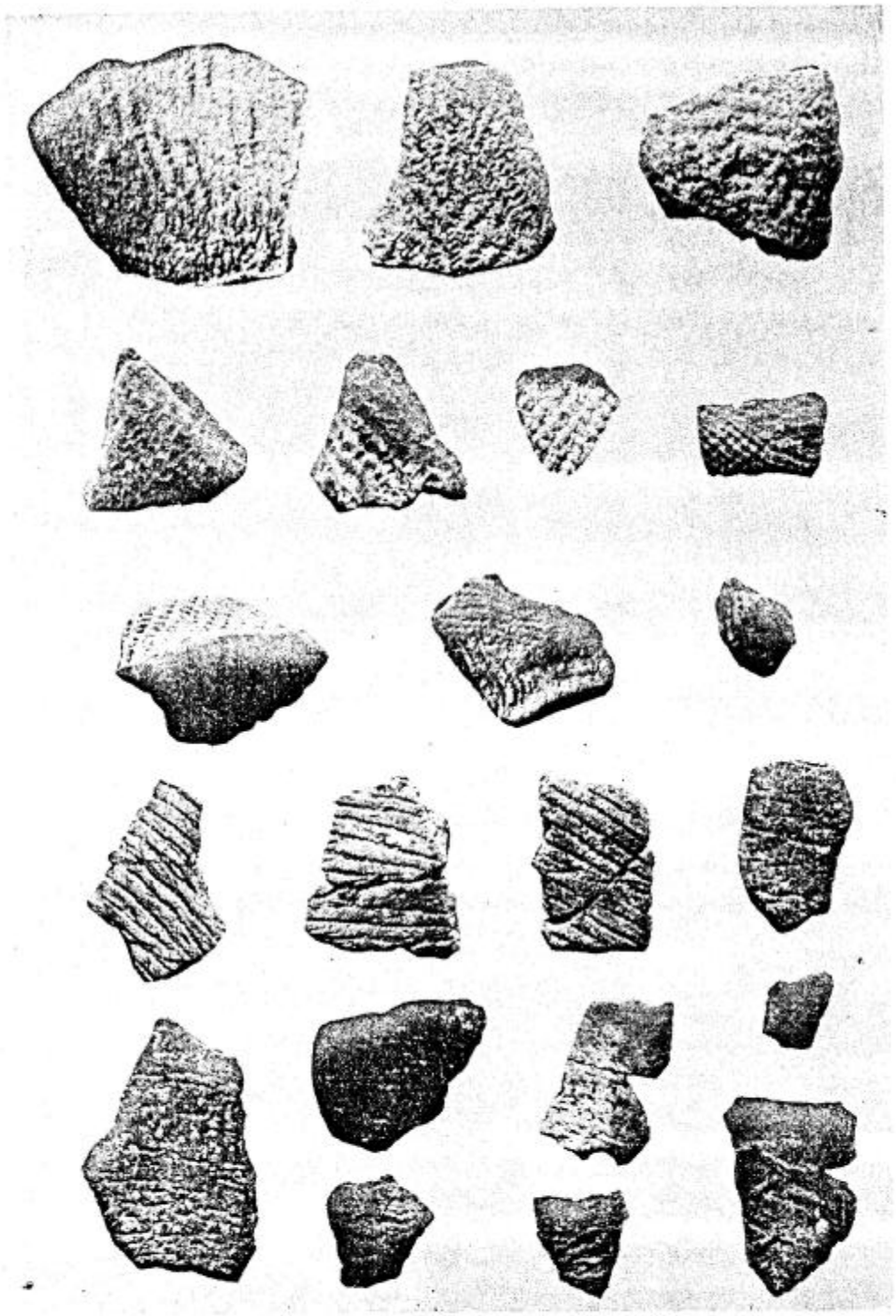


図　版　4　　S = 1/2

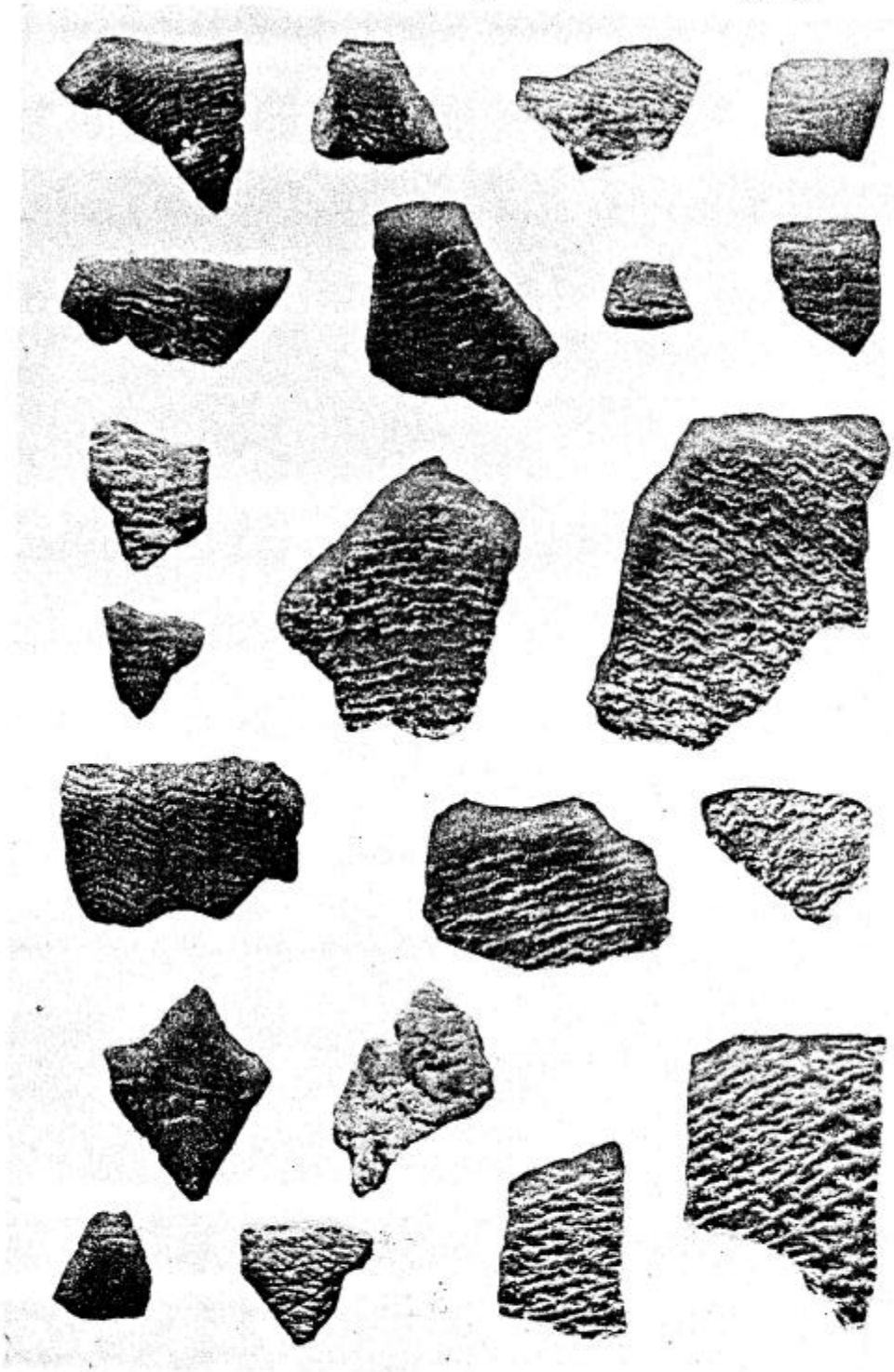


図　版　5　　S = ½

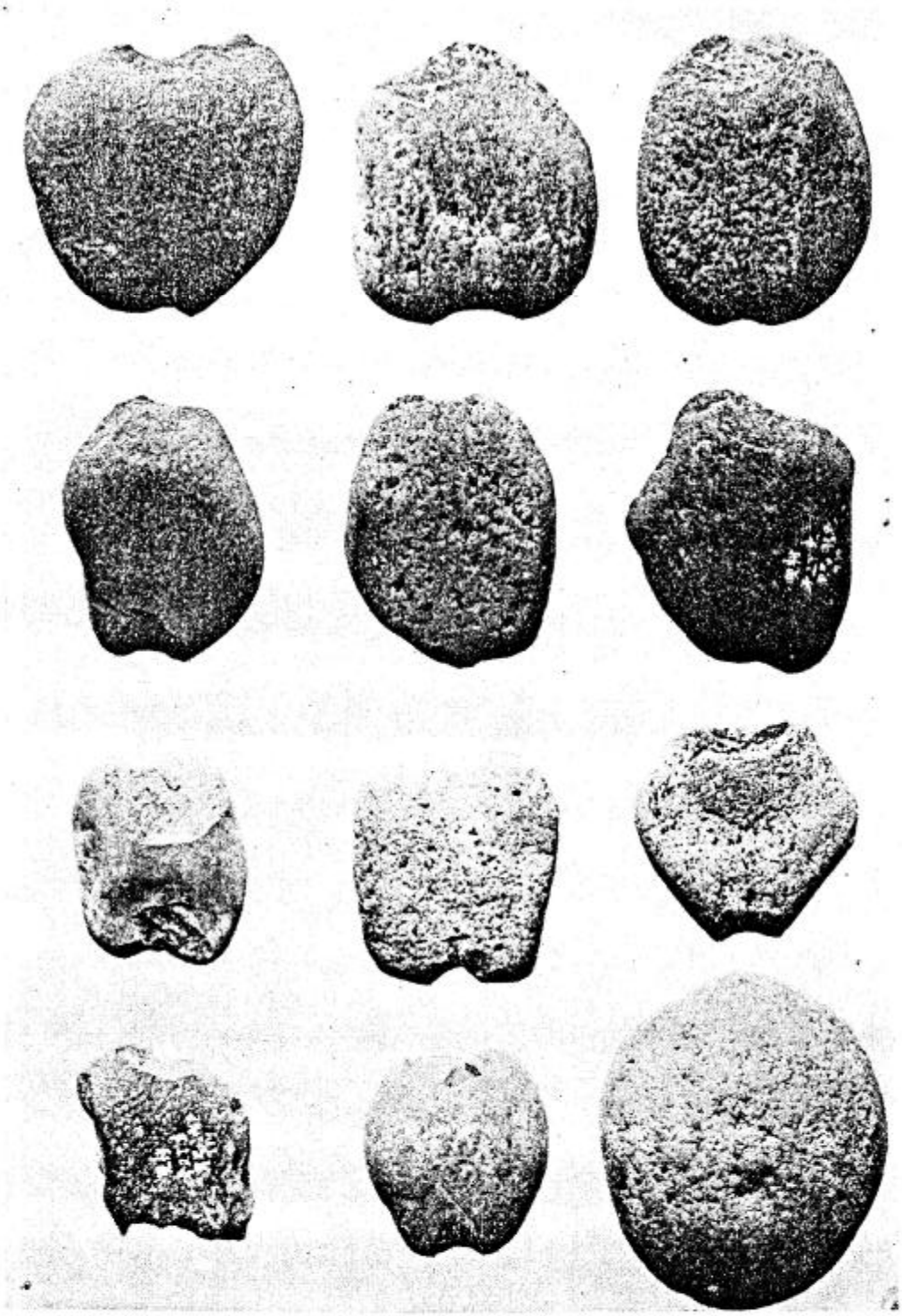


図　版　6

石　器　S＝½

刻　線　礫　S＝½